

セミが鳴き始める時期、ジメジメした空気にうんざりする。目の前の理科の教師はチョークの軽快な音を教室に響かせる。正直言つて、こんな簡単な問題をノートに書き写す気にならない。ならないのだが、教師に目をつけられたくはないので、とりあえず書き写す作業だけをする。

「じゃあこの問題を、うーん……よし木山さん、分かりますか？」

「あ、ええと……」

「分からない？」

「……は？」

ただ、隣の席に座る彼女にとってはそうではなかったようだ。

「仕方ないか。じゃあ隣にいつてみて……御影みかげさん分かりますか？」

「宵の明星です。」

淡々と答える。

「その通りですね。」

大体どうして、暑苦しい昼間から天体の勉強なんてしないといけないのだろう、という愚痴を心にしまう。隣を見ると木山さんは落ち込んだ表情をしていたのが印象に残った。

天体の話は終わり、今度は目の前に数学教師が何かを言っている。簡単な数式に幾分もかけるのはどうかと思うのだが。

「この時このXの値はいくらだ？木山。」

「あ、ええつと……」

やはり、彼女にとつては難問に成りうるのだろう。

「全く。じゃあ御影、いくらだ？」

「8です。」

「そうだ。さすがだな。」

何がさすがなのかさっぱりわからないが、そんなことよりも、また隣の木山さんは落ち込んでいる事の方が気にかかった。

「ちなみにここは明日の小テストの範囲でもあるからな。しっかり勉強しておくように。」

数学教師が、突然の告白にクラスがざわつく。この教師のテストは小テストですら難しいと評判なのだ。内申に直に関わってくるのでクラス中の不満は当然と言える。

授業終了のチャイムがなって、起立、礼、とお辞儀をする。

俺は心の中で深呼吸をして落ち着いてから、「よし」と意義込んで、毎日隣で座っている女の子に話しかける。

「あの、木山さん。」

……声が裏返ってしまったが、大丈夫、予想通りだ。問題ない。

「あ、ええ。あの……御影くん？」

木山さんは心底驚いた顔をしたが、そんなことも予想通りだ。ここは我が作戦を続行させる。「明日数学の小テストあるみたいだけど、木山さんは大丈夫？」

「え、ああ：：うん。私、バカだから：：」

「そんなことない。しっかり要点をまとめて勉強すればいい点が取れるようになるから！」

大丈夫、作戦は順調だ。順調すぎるが、上から目線になっている嫌いがあるのは気をつけなければ。

「そうなのかな・・・」

「うんうん。」

「あ、でも私要領も悪いし・・・」

一瞬の沈黙が起きる。大丈夫、言える。

「じゃ、じゃあ俺が教えてあげようか？」

よし、決まった。トリプルアクセルからの4回転ジャンプぐらい決まった。：：俺は一体何を言っているんだ。

「え、私に？」

「うん。迷惑かな？」

「いや、そんなことはないですけど：：」

よし、作戦は大成功だ。何故か敬語なのはこの際気にしないでおう。

「じゃあ決定だね。っと、もうすぐ休み時間が終わってしまうな。放課後、時間空いてる？」

「はい、大丈夫ですけど：：」

「けど？」

一抹の不安を覚える。心臓に悪いのでやめてほしい。

「あ、いえ何でもありません。」

「じゃ、約束だからね。」

「は、はい。」

木山さんは何故か感慨にふけっているような顔をしている：：と、いけない。いい加減顔を見つめてしまう癖はどうにかしたほうがいいな。それにしても、変にテンパってしまったが、うまくいって良かった。しかし、なんで敬語だったんだろうか。

その後、淡々と授業は進み、昼休みになった。教室中昼休みの活気でざわついている中、飯を食べていると、机の向かいから声が聞こえた。

「御影さ、さっきの休み時間木山さんと喋ってたじゃん？ 何話してたの？」

俺の数少ない友人である鳴原（なりはら）からだ。昼を食っている最中に喋られると少し困るのだが。

まあ一緒に飯を食っているのだから仕方ないと言えば仕方ない。

「大した話じゃないよ。明日の数学の小テストの事とか」

木山さんとは離れて食べているので、この会話に気づかれることはないが、こいつに気づかれるのも嫌なので、関心なさげに、ありのままの事実を言う。

「そうか。でも俺、あいつがあんなに誰かと話しているの初めて見たぞ。」

「うん。俺も初めて話しかけたんだ。でも別に普通だったぞ？」

敬語が混じっていたりで少し普通ではなかった気がするが、ここではこの返答がベストなはずだ。事細かにどこが普通じゃなかったのか説明するのも嫌だし。

「うーん、ちよっと信じがたいな。木山さんは今年同じクラスになって初めて知ったけど、いつも一人じゃん。授業中先生に当てられても答えたところ見たことないし。言っちゃ悪いけど、何

考えているのか分からないっていうか…」

そうなのだ。彼女が誰かと喋っているのをあまり聞いたことがない。今だって昼を一人で食べているし。

「でも、うん…何か理由でもあったのかな、って思う。」

感じたままの答えで返答する。嘘はついていない。

「なんか歯切れが悪いな。でもまあ木山さんに話しかけるとは勇気があるなと思うぞ。それともやっぱり生徒会長は誰とでも仲良く接しないといけないとか考えてるのか？」

「そんなことない。さっきも言ったけど別に普通だったって。それに生徒会長は内申にいいかなって思っただけで別に生徒会長だからって訳じゃない。」

こいつは事あるごとに俺が生徒会長なのをネタにするので大概にして欲しい。後半の説明も何度したことか。

「そうかそうか。御影は進路のことばかりだな。高校受験に生徒会長が有利とかないだろ。…でも、やっぱり他の事とか考えたりするんだろ。」

口角を少しあげてこつちを見た。世間一般ではあれを気持ち悪いと言うのだろう。

「いやいや俺たち今3年生だぜ。進路以外考えられないだろ。」
嘘が混じったせい少し焦っていたかもしれない。しかし、本当は考えているだなんて、こいつだけには口が裂けても言えない。言いたくない。

「そうか。そういえばなんで木山さんに話しかけたんだっけ？」

「え、いや、えっと特に理由はない。ただ隣だったし。それだけだ。」

しくじった。この質問に対する答えは用意してなかった。何たる不覚。どう考えても「それだけじゃないんだよ」と言っているような答え方だ。

「確かに木山さんって寡黙だけど可愛いものなあ。」

「別にそんな事考えて話した訳じゃないさ。」

くそ、こいつ、完全に調子に乗っている。腹が立つが、こいつは腕が立つので余計に腹が立つ。ここは我慢だ。

「ふーん？」

だから、その気持ち悪い笑顔をどうかしてください。

*

「じゃあ木山さん。数学やろうか。」

「はい…」

午後の授業も終わり、約束の放課後になった。しかし、彼女の言葉には元気がない。

「木山さん、乗り気じゃない？」

「あ、そんなことないです…」

そうは言っているものの、敬語使われているってことは、まだ信用されていないのかもしれない。つまり、これから仲良くなっていけば敬語は直るかもしれないってことか。

「御影くん？」

つと、考えが過ぎてしまった。

「あ、ごめんごめん。じゃあ始めようか。」

「はい。」

とりあえず、今回はあまり寄り道せず勉強をすすめて行くのが最善か。

「多分明日の小テストでは二次関数の応用が出ると思うけど、どの辺が分からない？」

「ええと、ぜ、全然分からないです…」

「分かった。じゃあ基礎からやっついていこうか。」

「はい。」

*

誰もいないはずの放課後の教室には二つの人影があった。両者は向かい合う形で、各々目の前のノートに筆を滑らせる。

「…これがこうだからこうなって」

「だから、これがこうなるんですね。つまり…」

「そうそう。次にこれを…」

「えっと、ここに代入すればいいんですね。だからこうなって、 X は4？」

「そうそう。すごいな、もう基礎が完璧だなんてやっぱり木山さん頭いいんじゃないの？」

勉強を始めてそろそろ二十分ほどが経過していた。自分にとっては慣れた範囲でも、始めからやろうとすれば基礎だけでも一時間近く使う場所なので、この習得の速さは素直に感心する。

「いえ、そんなこと…御影くんの教え方が上手だからです。」

勉強が進むにつれ、木山さんも積極的とまではいかないが、以前と比べ大分自分から喋ってくれるようになった。しかし、未だ敬語はなくなっていないのが少し悔しい。

「じゃあ基礎はもう完璧みたいだし応用にいつてみようか。」

「はい。」

「応用では二次関数と一次関数が組み合わされたグラフが出るんだ。だから一次関数も理解しとかなないといけないんだけど。」

「はい。」

「一次関数はできる？」

「多分、できると思います。」

できる、という答えはむしろ、想定外だった。しかし、確かに一次関数は一年以上近く前の範囲なので、その辺りはできていたのかもしれない。

「じゃあ。これ分かる」

試しに簡単なグラフをノートの端に書いてみる。

「えっと、 $y=2x+5c$ 」

即答だった。確かにできるといえるのは間違っていないらしい。

「お、じゃあこれは？」

今度は少しややこしいグラフを書いてみる。今度は分かったとしても計算する時間が必要なはずだけだ。

「 $y=2/3x-8/3$ 」

予想のはるか上だった。もしかすると、一次関数は俺より強いかもしれない。

「すごいな。一次関数はバッチリなんだな。」

俺にもちよつとしたプライドがあったらしい。教えている立場上もあって、俺より上かもだなんて言えなかった。

「まあ、はい。」

「じゃあこれですぐに応用問題に取りかかれるな。」

ただ、これで日が暮れるまでには応用も終わりそうなので、それだけは助かった。

「はい。」

彼女の気のいい返事が教室にこだまする。

*

日も暮れかかり、教室が赤く照らされる。かれこれ数時間近くはやっただろうか。

「いや、木山さんの物覚えの良さには感服するよ。やっぱり頭良いよ木山さんは。」

ようやく勉強は終わり、ありのままの感想を述べる。

「御影くんの教え方も上手だからです。本当に御影くんは何でもできるんですね。」

「え、そんなことないよ。俺にも全然できないことがあるし……」

「そうなんですか？」

「そりゃあ俺だって普通の中学生だし。でも、いつかは出来るようになってみせる、とは思う。」

そう、木山さんも本当に喋ってくれるようになった。仲良くなるまでの記念すべき第一歩を踏み出せたわけだ。

「あ……」

ふと、何かに気づいたような声が聞こえた。おそらくは彼女の発した言葉だったのだろうが、そんなことははっきり言ってどうでも良かった。本当に気にすべきは彼女が、何故か、涙を流していたことだったから。

「え、木山さん。どうしたの!？」

あまりの出来事に冷静さを欠いて大声で叫んでしまう。

「あ、ごめんなさい……いえ、何でもありません」

しかし、彼女は、俺よりも落ち着いて涙を拭い、そう言った。

「何でもなくていきなり泣くはずないじゃん。俺何かしちゃった？」

「いえ、本当に何でもありません。ただ……」

何でもないわけがない。それはお互いに分かっている。きっと理由がある。それは果たして本当に問わないといけないことなのか。問われないことなのか。いや、実際にはただ、俺が聞いただけだったのかもしれない。

「ただ……?」

「あ、えつと……ごめんなさい。この話はやめにしませんか……」

「え……」

大失敗だった。歴史的失敗だ。

「ごめんなさい。今日は本当にありがとうございました。もう暗くなってきましたし、帰りますね。」

カバンに荷物を詰め込んで、駆け足で教室を出て行く。俺には止める暇がないほどだった。いや、実際には俺が唾然としている間に行われたからだろう。

「あ、木山さん！」

やっとの思いで声を出す。

「また明日。さようなら。」

しかし、彼女はそう言い残し、彼女は教室のドアを勢いよく開け、そのまま去っていった。

「行っちゃったか……」

教室には虚しい声だけが響く。それを聴く人は誰もいない。一体何を間違えたのか。これじゃあ振り出しに戻るよりきついかもしれない。

そんなことを考えていると、教室のスピーカーから明るい呼び出し音が流れた。

「下校時刻となりました。校内に残っている生徒は速やかに帰りましょう。繰り返します……」

「ま、考えても分からないし俺も帰るか。」

何事も考えすぎは良くないのだ。家に帰ればまだまだ悩める時間はあるのだし。

誰もいなくなった教室の鍵を閉め、職員室に鍵を返してから、俺も同じく帰路についた。しかし、結局家に帰っても、何も分からないままだったのは言うまでもない事だろう。

*

「おい、御影、おはよー。雨濡れたか？」

教室に入った途端、鳴原からの声が聞こえた。

「おはよう、小雨程度だったからそんなにだ。」

適当な挨拶を済まして、教室を見渡す。木山さんは既に教室で自分の席に座っていた。

「木山さん、おはよう。」

丁寧な挨拶をする。ここで拒絶されたら絶望的だが。

「あ、おはようございます。……えつと、昨日はごめんなさい。」

とりあえず、それだけはなかったので安心だ。ただ、謝ってもらおう義理はないんだけどな。

「いやいや大丈夫だよ。何か理由でもあったんだろうし。」

……しかし、この期に及んでも少しでも理由を聞こうとする性格に自分で辟易してしまう。何も考えずに喋るのはやめた方がいいな。

「ええまあ……はい。」

結果的には理由は聞けなかったが、それでも振り出しに戻ったというわけではなさそうなのでそれだけは喜ぶべきだろう。

朝のショートホームルームが終われば、すぐに数学が始まる。教室中では数学の教科書を開い

て、友人と黙弁っているクラスメートが大半だ。喋るか勉強するかどっちかにすればいいのに。隣の木山さんかというと、教科書を開いて勉強に集中していた。

結局この日は、数学のテスト終了後、教室で「むずーい」とか「全然できねー」などという不平不満が溢れる中、それに便乗して少しだけテストの出来具合について話した程度でほとんど進展はなかった。それでも少しずつ前進していけばそれでもいいと思う。

受験生の一日は早い。あつという間に一日が過ぎて、また数学の授業がある。三日連続で数学があるのは少々メリハリがないのではないだろうか。などという時間割に対する文句を心の中で呟いていると、教室のドアが景気良く開く。もうちょっと静かに開けられないのか、この教師は。

「それじゃあ昨日行った小テストを返却する。今回は難しく作ったからな。皆点数が予想以上に悪かった。が、その中でも満点を取ったのが2人いた。

御影と鳴原だ。皆拍手。」

と言つて一人虚しく拍手をする数学教師。いい加減寒いので拍手やめてもらえないかな。しかし、木山さんは残念ながら満点は取れなかったみたいだな。結構頑張っていたのに、我が事のように無念に思う。

教室は授業中ながらもテストの点数について盛り上がっていた。こればかりは、教師もどうしようもないのだろう。

「木山さん、どうだった？」

そう言つて、隣の彼女へと話しかける。折角の会話のチャンスだ。逃す手はない。

「え、あ…」

何故か彼女はひどく動揺していたように思えたが、チラッと、彼女の答案用紙が見えてしまった。

「木山さん？あ、98点か、惜しかったね。まあ最後は難しかったし仕方ないよ。部分点が取れただけでも…ええ？」

「あ、ごめん…なさい。ごめんなさい！」

何故か、彼女は俺に平謝りをしながら涙を流す。当然ながら俺には全く事情が掴めなかった。

「え、女さんどうしたの!？」

こんな状況、冷静でいられるはずがない。とりあえず何故泣いているのかを聞かないと何も出れない。

「ごめんなさい!ごめんなさい!！」

しかし、彼女は何も言わずただただ、謝り続ける。

「ん、どうしたんだ?」「何で泣いてるんだ?」「え、何かあったの?」「えー何々?」「何か男が女を泣かせたみたい。」

騒ぎは教室中に広まってしまふ。俺は本当に無力だった。こんなことになつても何をすればいいか全くわからない。

「ほらほら、静かにしろ。木山、どうした?いい点取ってるじゃないか。」

さすがの騒ぎに教師も放っておけなくなったのだろう。ただ、これには正直助かった。もう俺にはどうすることもできなかった。しかし、教師が何を話しても、彼女は泣き止むことはなかった。

「仕方ない、保健委員、木山を保健室まで連れて行ってやれ」

諦めた数学教師は、逃げの一手ではあったものの、この場では最善手であろう選択肢を選択し

た。

「はい。木山さん、歩ける？」

保健委員が席を立ち、彼女の元へと歩み寄る。

「うん……めん。」

「では保健室まで行ってきます。」

「ああ頼んだぞ。」

こうして、彼女は教室から出て行った。俺はただ、呆然と立つことしかできなかった。

「……って、と。尋問する気はないが御影、何か心当たりはあるか？」

「いえ……分かりません。」

本当に分からない。にも関わらず、「絶対嘘だ」「最低だな」などという小声の呟きが聞こえてくる。好き勝手言われるのは悔しいが、実際俺は何も出来なかったのだ。これは一種の罰なのかもしれない。

「ふむ。まあ後は保健委員に任せて授業を再開するぞ。皆席に戻れ。」

その後保健委員だけが帰ってきてからは、平常の授業に戻り、そのまま終了のチャイムまで何事も起こらなかった。

「一体何があったんだ？」

数学終わりの休み時間、鳴原が心配した声で話しかけてきた。

「本当に何も分からないんだ。点数も良かったし。全然分からない。」

「でも、お前が絡んでいる事は間違いないんじゃない？」

「多分。俺が話しかけてからだっただし。でも全然心当たりがないんだ……」

俺が悪いのはほぼ間違いない。けど、理由が分からないのだ。何を謝ればいいのか全くわからない。

「じゃあ木山さんに会ってこいよ。もしかしたら理由教えてくれるかもしれないし。」

「え、今から？」

「今からはちよつとまずいかもな。彼女が落ち着いた頃に行った方がいいな。」

真面目にどうしようか悩んでいた俺にとって、鳴原の言葉はとてもありがたかった。

「ありがとう。そうしてみる。」

純粹な感謝の言葉を贈り、昼休みに行くことを決意した。

残りの午前中の授業も滞りなく進み、目的の昼休みに入った。昼食を後におき、真っ先に保健室に向かう。昼休みの廊下は人でごった返していたが、保健室の前の廊下には誰ひとりとしていなかった。保健室に入る姿は何故か見られなくなかったのでありがたい。俺は保健室の扉を数回ノックし、扉を開ける。

「失礼します。」

「こんにちは。調子でも悪いのかな？」

保健室に入ると、白衣を来た若い女が椅子に座っていた。回転式の椅子をこちらに向けて、そのまま立ち上がる。別に怪我とかではないので、立ち上がってもらい必要はなかったのだが。

「いえ、木山さんと同じクラスの御影と言います。木山さんの具合はどうだろうと思ひまして。」

「木山さん？木山さんならさつき親御さんが迎えに来ていただいて家に帰ったわ。」

養護教諭は木山さんに用がある、と聞いて少し驚いたような顔をしたが、すぐに冷静に今の状況を説明してくれた。

「え、そうなんですか。」

俺はと言うと、養護教諭の言葉に驚きを隠せなかった。まさか、早退するほどのものだとは思っていなかったからだ。実を言うと昼休みに入るまでにひよっこり教室に帰ってくるんじゃないかと思っていたほどだ。

「ええ。調子が悪い、という感じじゃなかったんだけどね。まああのままだったら学校に残っていても授業受けられなかっただろうし。」

彼女は淡々と木山さんの状況を説明してくれた。しかし、ただのクラスメートというだけでこんなに言っているものなのだろうか。

「そうですね。ありがとうございます。失礼します。」

木山さんがどういう状態だったのか、と言う情報は非常にありがたい。しかし、知りたかった情報は全く楽観していいものではなかった。早退するなんてよっぽどのことだろう。そして、その原因は俺にある。鈍感、というつもりはなかったが、その原因に全く心当たりがないのは認めざるを得なかった。

「ええ。どういたしました。頑張ってたね。」

「……え？」

「御影くんだね？木山さんが心配してたわ。心配される方だって言うのにね。」

全く、この教諭の言葉には逐一驚かされる。木山さんが俺に？もう全く訳がわからない。

「……では。」

保健室から立ち去って、廊下を歩く。教室はいつもとんなら変わらずに、わいわいと賑わっていた。

「お、早かったな。どうだった？」

鳴原だ。彼も彼なりに心配していたらしい。

「木山さん早退してみたみたい。」

「そうなのか。大分深刻だな。本当に心当たりはないのか？」

「……」

鳴原も俺の様子を見てはあと深い溜息を吐いた。しかし、そのあとは、何も引きずらず、特に話題がないまま昼休みは終わった。

午後の授業も全く気乗りせず、ぼおつとしている間に授業は全て終わっていた。この時期にイベントがなかったのは僥倖だった。こんな時に生徒会なんてあったら何も発言できずに生徒会に迷惑をかけていただろう。しかし、他人の心配をする暇なんてものは俺にはなかったのだ。家に帰ってから一人悩んでいたが、どうしようかというアイデアは全く出ず、考え事をしていたらそのまま朝になっていた。

「行ってきます。」

出かけの挨拶をして家を出る。外はあいにくの大雨だった。

まるで、自分の今の気落ちした心境を嘲笑うかのように、土砂降りの雨が俺を濡らしてきた。

傘を手にとって、歩こうとすると、家の前に一人の影が立っているのが見えた。しかし、その人影が木山さんであったことはすぐに分かった。登校中に彼女と会うのはこれが初めてだ。

「木山さん、おはよう。」

「あ、おはようございます。御影くん。あの……えっと、その……昨日の事謝ろうと思って。」

謝るのはこっちの方じゃないだろうか。そして、それよりも気にかかった点の一つ。

「あ…もしかして俺の事待ってたとか…?」

「はい…」

この土砂降りの雨の中、待つという作業がどれだけ辛いものだったのかは容易に想像できる。

「ごめん、気を使わせたみたいで。」

「いえ、そんなことありません。全部私が悪かったんです。」

「でも、それは何か理由があつての事だよね？」

あ、ごめん。別に理由を聞きたがつてるわけじゃないんだ。」

俺は、本当に卑怯だと思う。先に木山さんが謝ったことにかまけて、まるで、俺は何も悪くなかったよね、とでも言いたいかなのような口ぶり。こんなんじや、本当に嫌われても仕方ないかもしれない。

「御影くんは、優しいですね。」

「——え?」

しかし、返ってきた答えは、俺の予想したものと全く別のものだった。

「バカだし、口下手だし、何考えてるのか分からない。そうよく言われる私に御影くんはそんなの関係なしに喋りかけてくれました。でも、きっと一時的なものだろう、と。同情した目で見られるだろう、と。そう思ってたんです。でも…違った。私って本当卑怯ですよ。御影くんはそういう人じゃないのに。ごめんなさい、昨日、聞いちゃったんです。私、保健室の先生と仲が良くて、それで、昨日御影くんが私の具合を見に来てくれたって事メールで教えてもらいました。」

「木山さん…」

違う。本当に卑怯なのは俺の方なんだ。彼女は自分が卑怯だと思った点を素直に言えて、俺は何も言えない。

「ごめんなさい。いきなりこんな話をしてしまって。でも、もしよければこれからも今まで通り接してくれると、その…嬉しいです。」

「あ…うん。」

全くもって俺は卑怯だ。

結局あの後一緒に登校したのにも関わらず、一言も喋らずに学校についてしまった。今までどおりに接してくれと彼女は言ってくれたのに、前の今までどおりになってしまった。俺にもう少しだけ勇気があればあるいは。

教室に入ると俺たち以外には誰もいなかった。一番乗りとはいっぴり以来だろう。そんなどうでもいいことを考えながら木山さんとそれぞれの席に荷物を置くと、鳴原が教室に入ってきた

「おはよー」

「おはよう」

挨拶を済ますと、彼は自分の席に座って…いや座らずに、何故かこつちまで来て俺の手を引っ張って廊下まで連れて行った。

「ふふん」

こいつ、自分の笑い方が他人にどう影響するのか学んだほうがいいかもしれない。

「何でそんな悟ったような目をしているんだ。」

「今日は久しぶりに御影より遅く来てしまったな。」

だからそのうすら笑いみたいなのをやめてくれ。

「ああ、そういうえば珍しいな。」

適当に返事をする。用があるならさつさと行ってくれ。

「珍しいのは御影が木山さんと一緒に通学してきたことじゃないのか？」

「——っ！！」

見てたのか……？」

なるほど、こいつの笑いはこういうことだったのか。こいつの意地汚さは俺のはるか上を行っている。

「いやーすまんすまん。ただあんまり話してたって感じじゃなかったけどな。仲直りはできたのか？」

「……自分でもできたのかどうか分からない。」

「はあ！？何それ。」

大声を上げないで欲しい。廊下を歩く生徒の視線が痛い。こっちもおかしいのは十分に分かっている。

「今まで通り接してくれ、って言われて。ただ、それでそのまま何も話せなくて。」

「お前は本当に色恋沙汰に関してからっきしだったからなあ……仕方ないといえば仕方ないか。色恋沙汰なんてことは一言も言っていないが、ここまで来るとさすがに取り繕うことも難しいか。」

「悪かったな。お前に言われると冗談じゃなくなるから余計落ち込むぞ。」

鳴原はハハと笑い、すぐに真剣な顔つきになった。認めるのは癪だが、こいつにアドバイスを貰えたら百人力だろう

「悪い。で、お前はどうしたいんだ？付き合いたいのか？」

「……ああ、できるならな。」

「なら押せ。どうせお前は不器用なんだから何も考えずストレートに行った方が勝率は高い。」勝率ってなんだ、と思ったがここで水を差すのは野暮なのでこいつの意見を聞くことにする。

「というわけで耳寄り情報を教えてやろう。明日理科の授業で小テストがあるみたいだぞ。」

と、思ったのに、こいつから出てきた言葉は恋愛に関するアドバイスではなく、ただ単にありがたい情報だった。

「え？何それ。初耳なんだけど。」

「そりゃあな。他クラスで抜き打ちテストという形で実施されてるらしい。まあそのクラスの奴から聞いたおかげで俺たちにとっては抜き打ちじゃなくなっただけだな。」

鳴原は冗談のような笑いを入れて、話してくれた。

「それは本当に耳寄りの情報だ。やっぱりお前は俺の親友だよ！」

「気持ち悪いよ……」

「ああすまん……」

もちろん、彼の言った言葉はテストがあるから勉強しておけよ、なんてことじゃない。勝負は放課後だ。誰ふり構わず感謝してる気がするが、ここは素直にやっぱり感謝するぞ、鳴原よ。

今日も今日とて授業はよどみなく進む。放課後が近づくにつれ少しずつ緊張する。六限目の授業が終わり、放課後を知らせるチャイムがなる。落ち着いて、これは二度目だ。大丈夫。

「あの、木山さん。」

「あ、はい。何でしょう。」

突然話しかけたせいかわ、少し驚かせてしまった。幸先が悪いな。

「実は明日理科のテストが抜き打ちであるって話を聞いたんだけど、良かったらまた一緒に勉強

しない？」

よし、言えた。完璧だ。文句なし。これ以上ないってぐらい自然な誘い方だっただろう。

「え、そうなんですか。ええと……あ。」

「……もしかして都合悪かった？」

「あ、いえ、そういう訳じゃなくて……」

あれか、木山さんは俺の心臓を悪くしたいのか。平常を保っているように見せているが、精神が瓦解する寸前だ。断られたらショック死する自信がある。

「えっと、その……——するなら私の家で勉強しませんか？」

俺の頭の中で「！」と「？」が大量発生している。何が起きたんだ。ちよつと理解が追いつかない。ダメだ、とりあえず上辺だけでも取り繕うことにしよう。

「え……それはその……いいの？俺なんかがお邪魔になって……」

全然取り繕えてない。適応力弱いな、俺。

「はい。大丈夫です。」

彼女の方がよっぽど冷静だ。これじゃあただ単に俺が恥ずかしいだけだ。

「な、なら行こうか。」

「はい。」

しかし、恥ずかしい思いはしたがそれ以上の成果は出たはず。ただ、家に呼ぶって一体……信用されてるってことで前向きに受け止めておこう。

下駄箱から一緒に出ると夕方も近いというのに太陽は元気に地球の大地を照らしていた。

「朝と違って快晴になったね。」

「そうですねー。」

普通に会話できるようになったのはいいが、女子と二人っきりで下校なんて何年ぶりだろうか。挙動不審になっていないだろうか。ほかの人からはなんて思われるだろうか。いかんいかん。変なところに考えが行く。平常心平常心。って、学校に傘を忘れてきてしまった……ダメだ、全然平常心保ててないな。

「御影くん……」

「ああいや、な、なんでもないですよ。」

うわあ、何か敬語になつちやつたし。ここは鳴原と一緒に帰っているように考えれば問題ない。とりあえず落ち着こう。

学校から彼女の家までは他愛のない会話をしながら向かった。終始俺の落ち着きがなかったよ。うな気がするが、気がするだけだ。彼女の家はこういつちやなんだけど、普通の二階建ての一軒家だった。彼女が玄関の扉を開けて入っていった。俺もそれに習って彼女の家にお邪魔する。

「お邪魔します。」

「あ、今家族は家にいませんよ？」

えっと、彼女は一体何を言っているんだ。今はこの家には俺と木山さんがいて、そのほかの人がいない。つまりこれは。

「じゃあ今はその……二人きり？」

「はい。少し二人きりになりたかったんです。」

ちよつと待て。頭が真っ白になるって本当にあるんだな。木山さんの言動が全くわからない。「じゃあ、私の部屋に行きましようか。」

ああ、そうだな。勉強するんだったら自分の部屋の方がいいもんな。そうだ。それ以外に考えられないな。

「はい。ここが私の部屋です。」

「……」

「御影くん？」

「……ああ、ごめんぼーつとしてた。綺麗な部屋だね。」

女の子らしい綺麗な部屋だ。勉強机も少し移動すれば二人で向かい合って勉強することもできるだろう。

「そうですか？良かったあ。」

「えっと、それじゃあ早速だけど勉強を始めようか。」

学生の本文は勉強だ。後はクラブに所属している人は運動も頑張ればいいと思う。以上。

「あ、その前に、こつちに……来てくれませんか？」

そうだな、机を運ばないといけないしな。それぐらいはお安い御用だ。ところでそつちはベッドがあるだけで、机は逆方向じゃないかな。

「ここに座ってください。」

ああ、お茶でも用意してくれるのかな。そんな気を使わなくてもいいのに。それにお茶を飲むならベッドの上より机出したほうがいいと思うよ。ところでどうして木山さんも座っているのかな。

「あの、二人きりになったのはですね……」

あ、はいはい、ちゃんと聞くので顔を近づけないでください。何かすごくいい匂いがする……じゃなくて。ええと、こういう時ってどうすればいいんですかね鳴原くん。

「その……謝ろうと思って。」

「……え、それって朝の事？」

「それも含めて全部です。御影くんは言いたくないなら言わなくていい。そう言ってくれましたけど、でもやっぱり御影くんには教えておこう。つて。じゃないと多分ここから進めないし、御影くんになら言ってもいい、つて思っただんです。」

……ごめんなさい。お母さん。謝ることは何一つないけど、何故か謝っておこうと思っただ。

「私の家族は3人家族です。お父さんとお母さん。そして私。……でも、去年までは4人家族だったんです。」

「え……？」

「私には一つ上の兄がいました。私が小学生の時はハッキリ言って仲は良くない方だったと思います。顔も見たくないとも思っていました。」

彼女は必死に、思い出したくないことを思い出すように、過去を語っていった。

「でも、私が中学に入って勉強が難しくなってきた時に兄が突然勉強を見てやる。と言ってくれたのです。」

何故か抵抗はありませんでした。でも、今までの家族としてあまり話していなかった関係のせいかまるで中学で出会った先輩と後輩のようになってしまつて、それで兄と話すときは敬語になつてしまつたのです。

多分御影くんも気づいていたと思います。私の喋り方に。」

俺は頷いて、話の続きを求める。

「兄は私のひいき目に見ても頭がよくて、私みたいなバカでもわかりやすく教えてくれて……そんな兄が——去年突然死んでしまいました。

交通事故で……塾からの帰り道、即死……だったそうです。

私はずっと兄は頭がよくて、なんで塾なんて通っているのだろう、って思っていました。でも、それは違つて。元々そんなに勉強ができたわけじゃなかったんです。

お母さんが、兄がこう言つてたと言いました。色々あつて妹と仲が悪くなつてしまつたけど、俺は仲直りしたいと思つている。そのために妹に勉強を教えてあげようと思う。と。」

この物語に俺は何も言えない。俺は安易に入つてはいけないような気がして。

「それは大成功だつたんだと思います。私は本当にバカで、でも、そのおかげで兄は私に勉強を教えてくれる。それがただ何よりうれしくて。

なんで、なんで気づかなかつたんだろう。兄は私に勉強を教えるために寝る間も惜しんで、勉強が嫌いなはずなのに塾にも行つて。

疲労がたまつて、そのせいでふらふらになつて。車に轢かれて……なんで……なんで……すべて私のせいだつたんです。兄が死んだのはすべて。」

「違う……」

安易に入つてはいけないだろう物語に俺の口は、勝手に介入した。ただ、そう感じたから。

しかし、彼女はそんな横槍一つ全く気にしなかつた。彼女の物語は俺の一言よりも重いだろうから。それは仕方のないことなんだと思う。

「でもそんな現実受け入れられなくて。受け入れたくなくて。そうしたら現実の何もかもが受け入れられなくなつて。

そんな、失意のどん底にずっと沈んでいた私に話しかけてくれた人が——あなたでした。

数学の勉強を教えてくれるつて言われたときに、私は兄が戻つてきた。そんな錯覚を覚えまして。そして、今度こそ教える必要はもうないな。つて思わせたくて。必死で頑張つて満点取るうと思つて。

でも、結果は……無様な形で。やっぱり私は何をしてもダメなんだなつて。バカなんだなつて。」

「違う。」

違う、違うんだ。何故気づいていない。

「でも何故か兄がまた教えてくれるなんて意味の分からない事を考えて。そしたら、また兄が死んでしまうんじゃないか。つて思つて……ほんと、自分でも理解できません。

実はあの時の記憶がないんです。あの後、気が付いたら保健室で寝ていました。きつと、無様だつたんでしょうね。私の姿。あはは。

つまり、そういうことだつたんです。御影くんの姿を兄にダブらせて……」

「違う……!」

「ええ。そうです。分かりきつたことです。御影くんと兄は違うんです。でも、違つてわかつて、何故かやつてしまつて……私本当にバカで人を傷つけてばかりで……本当に……本当に……ごめんなさい……」

……もうこれ以上は耐えられない——

「あーもう!違う違う違う!確かに俺は兄ではない。

ただ、確かに俺は兄ではないが兄の気持ちくらいなら分かる。」

「……え?」

彼女は呆気にとられたようにこつちを見る。

「兄が死んだのが私のせいだ。なんて勘違いしてんじやねえ！いいか、確かに仲直りのために前に勉強を教えてあげていたとしても、それが成功した後でお前がバカだからなんて理由でふらになるまで普通勉強をするか？」

お前の兄がふらふらになるまで勉強したのは、お前に勉強を教えるのが楽しくて、それは自分の体を犠牲にしてまでする価値があったからに決まってるだろ！」

「…そんな…そんなことない…こんなバカに勉強教えて楽しいはずない…」

あーもう、こいつは。こういう事だけは物分りが悪いのか。

「それも違う！お前はバカなんかじゃない。本当はすごく頭の良いやつだ。多分、それは俺よりも。」

「そんなはず…ない…！」

「いいや、そうだ。きつとお前は兄に褒めてもらうのが嬉しくて、最初は何も分からないふりして。物覚えがいいと思わせて、兄との時間を大切に、楽しくしようとしたんだ。」

「——っ！」

彼女は、ハッと何か気づいた顔をして、そして、何も反論をしなかった。やはり、何か思い当たる節があったらしい。

「俺はそれが悪いことだとは思えない。だって実際俺も木山さんに教えている時、すつごく楽しかったんだ。その過程が嘘だったとして、あの気持ち嘘だったなんて思えない。」

それはきつと、本当に頭がよくないとできなくて、でもそれを隠すためにまるで呪縛にも似たような思いを抱いた。でも、それは木山さん自身が、一番良く分かってるんじゃないかな？

…だから、それ以上自分を否定するのはやめよう？」

「………」

「きつと木山さんのお兄さんもそれを望んでいるんじゃないかな。」

「そんな…分かったように…」

「分かるさ！だって——俺は今まで木山さんをずっと見てたから…！」

「——！」

「誰よりも木山さんが好きで好きで！いざ勇気をもって話してみると本当に楽しくって。木山さんへの思いが募って、木山さんの事ばかり考えて。だから、だから木山さんのことも、自分のことのようにわかったんだと思う。」

…何故か沈黙が続く。心臓の鼓動がいつもより早く脈打つ。ても当てていないのに鼓動が聞こえるぐらいだ。おそらく実際には沈黙は数秒に満たなかったが、感覚的に十分近く経ったような、そんな短く、長かった沈黙を彼女が破った。

「…そんな自信たつぷりに私の悩みを解消させたみたいに言って、間違ってたらどうするのよ……」

まだそんなこと言うのか。いや、違うか、これは…

「でも、あつてるんだろ？」

「——うん…多分その通り。」

ありがとう。御影くん。やつぱり話してよかったなあ。うん。一気に2つの大きな悩みが解消できたみたい。」

「2つ……？」

「うん、うわあ……これ言うの恥ずかしいなあ。御影くんってやっぱすごいね。えっと、……恋の悩み。私も——男君の事が好きみたい。」

そう言つて、木山さんは言葉だけじゃなく恥ずかしい、と言わんばかりに顔を俯ける。彼女の耳まで真っ赤なのがすぐに見て取れた。

そして、ここまで来てようやく、俺が勢いに任せて告白してしまっていたことに気づいた。

「え、本当に……？」

なんて、間の抜けた声。これじゃあ折角決めたのに台無しだ。

「疑り深いなあ。でも、御影くんに打ち明けてよかった。」

「そういつてくれるとこっちも嬉しいよ。」

そう言つて、二人、目を合わせる。考えていることは多分、一緒。お互いがお互いに告白したのだ。先に口を開いたのは、彼女の方だった。

「えっと、その、で、つまり……今からっ。」

「……恋人になつたんだよね。」

彼女の言葉に俺も続ける。彼女は本当に俺の彼女になつたというわけだ。あ、やばい。多分鳴原に負けず劣らない気持ち悪い笑いが溢れているかも。

「えへへ。私御影くんが初めての相手です。恋が実るってこんなに嬉しいことなんです。」

ああ、そうだな。

「俺もすごく嬉しい。」

「……」

「……」

沈黙が続く、それは、気まずい沈黙ではなく、お互いに幸せな沈黙。願わくば、このまま時が止まつてしまえば良いと思うくらいに。

しかし、現実は無情にもそんな願いを儂く消す。

「……あ！」

彼女が突然大声で叫んだ。

「ああ、ごめんなさい。うっかりしてた。もうこんな時間。家族がそろそろ帰ってきて、その……」
それなら仕方ない。そもそも彼女の家に来ているということ自体おかしな、ではないがすごいことなんだから。

「ああ、残念だけどまた明日だね。」

「はい、残念です……」

そして、俺はここで、この家に来た本来の目的を失念していたことに気づいた。

「そーいや全然勉強できなかったね。」

「あ、そうですね……」

「ま、元々抜き打ちテストだし、お互い実力で頑張ろう。木山さんならきっといけるから。」
「ありがとう御影くん。じゃあ、また明日。」

こうしてやってきた理科の前の休み時間。ほかのクラスから情報を手に入れた人が多かつたらしく、皆が皆教科書を必至にチェックしていた。しかし、休み時間と言うのは、何かに費やそうとすればとても短いものだ。教室中がこだまのようにやばいやばいと言いつつ合っているうちに授業開始のチャイムは鳴ってしまう。

理科の教師が大きな封筒をもってその中身の紙を皆に配っていく。

よーい始め。の合図と共にその紙の空白を埋めるためのペンの音が鳴り響く。俺はいち早く空欄の中身を書き終わり、終了の合図を待った。

「はい、そこまで。前後で答案を交換して丸付けしてください。丸付けが終わったら点数を記入して後ろから集めてください。」

そう言つて、教師が一問一問答えを言っていくが、皆の赤ペンのノリは悪い。回収が終わると、教室中、思い思いに自分がどれだけひどかったかを隣の人に報告していた。

「はい、静かにしてください。やっぱり皆さん点数が低いですね。日頃の勉強を怠らないように。」

えっと、すごいですね。満点があります。

ええと、御影さんと嶋原さん。そして——木山さん。この三人です。よく頑張りましたね。おめでとう。」

教室中がざわつく。今までの満点は普通、俺と嶋原の二人だけだったのだ。それが三人ともなれば、そのもう一人は必然的に褒め称えられるだろう。

その証拠に彼女は周りの席の人から絶賛され注目を浴びている。その様子を見てみると、ふと、彼女と目があつた。彼女は「やったよ！」と言わんばかりの笑顔でこっちを見たので、俺も嬉しさで笑顔を隠しきれず、二人して小さく笑いあつた。

*

こうして今日も、変わらない一日が終わり、皆が、勉強するための塾やら引退間近のクラブやらそれぞれの場所に移っていく。俺はと言うと、勿論、彼女のもとへと行った。

「じゃあ一緒に帰ろうか。」

「うん……」

「ん、どうかした？」

「ああいや……御影くんどうして傘持ってるのかなって。」

そう言つて彼女は俺が右手で持っている傘に視線を落とした。

「昨日持つて帰るのを忘れてて……ね。」

少し恥ずかしいが事実だ。誰にでもあることだし、仕方ないよな。

「……カバンと傘を両手に持つのって変だよ。」

と、彼女はそれは絶対にやめたほうがいいよ、という口調でそう言い切った。

「え、そう？でも片手で2つ持つのも変な気がするけど……」

「じゃあ私が傘持つ。私両手空いてるし。」

彼女のカバンは両肩がけのタイプだ。確かに、両手は空いてはいるけども。

「いやいや、木山さんに俺の荷物持たせるわけにはいかないよ。」

「いいから。」

そう言つて強引に俺の右手から傘を奪い取る。やっぱり彼女が何をしたいのかよくわからない。

「傘なんて取つてどうするのか……」

そう言うやいなや、彼女は左手で俺の右手をギュッと掴んだ。

「あ……」

あー……俺つてやっぱり鈍感なのかもしれない。ここまでリードしてもらうと男として俺の立つ瀬がないが、ここは俺も彼女の左手を握り返す。彼女の顔が真っ赤になる様子が見て取れて少し面白い。

「なんか、いいね。」

特に言う言葉が思いつかなかったので、ありのままの感想を言う。彼女も軽く頷いてくれた。

「あ」

お互いが同時に声を上げた。

「綺麗……」

次に声を上げたのは彼女だった。俺たち二人の視線の先には、大きな、大きな、虹がかかっていた。

「絶対……離さないから……」

「うん……約束だからね」

終わり